



News Letter

No. **6** November 2005

21st Century COE Program

Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

進化心理学という学問

長谷川真理子
(早稲田大学)



進化心理学という学問は、何をめざしているのだろうか？ それは、人間の脳の働き、人間の生み出すものが、進化によってどのように形成されてきたのかを明らかにし、人間性の本質を理解することである。

進化心理学の概念は、古くは1960年代に、生態学者のマイケル・ギゼリンが提出していた。しかし、私自身、当時のギゼリンの考えを詳しくは知らない。その後、1988年、カナダの心理学者、マーティン・デイリーとマーゴ・ウィルソンによる「Homicide」(邦訳『人が人を殺すとき』)が、その始めに、「本書は、進化心理学の書である」と明記して、それが何をめざすものであるかを述べた。

しかし、もっと広く進化心理学の考えを広めたのは、ジェローム・バーコウ、レダ・コスミデス、ジョン・トゥービーの3人による編著、「Adapted Mind」(1992年)であろう。同書では、文化の多様性や学習による可塑性のすべてを見たうえで、しかし、ホモ・サピエンスという種に固有な適応形態としての脳と心のあり方を探る研究方針が、具体的な興味深い研究成果とともに披露されていた。

さて、このようなデビューから約20年。進化心理学は、人間理解にどのように貢献しただろう？ 人間の脳の働きの基本設計が生物進化の産物であり、適応的であるという前提は、今や広く受け入れられている。では、どれほどの部分が遺伝的プログラムかという、これは、当初考えていたよりもずっと固定的ではないようだ。ヒト・ゲノムの解読が終了し、チンパンジー・ゲノムも概要がつかめた現在、細かな行動がすべてプログラムされていることはあり得ない。ヒトに固有の遺伝子は、それほど多くはないのである。

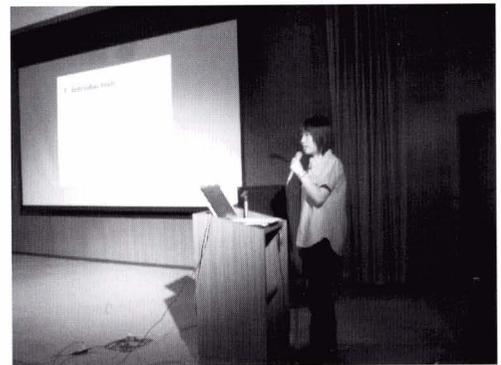
進化心理学の今後の方向でもっとも興味深いのは、比較的少ない遺伝子をもとに、どのようにしてこれほど複雑、かつ適応的な人間行動が生み出されるのかの解明であろう。今まさに作られようとしている学問の世界に惹かれる人間にとっては、こんなに興奮に満ちた分野はないように思う。

Contents

進化心理学という学問	1
第2回国際ワークショップ「言語脳の探求」	2
若手研究発表支援—国際学会発表	3
新しい研究動向—こんな研究をはじめました!	4
錯覚展報告	5
研究者紹介(その6)	6
プログラムの近況(2005年7月~10月)	7
活動報告(2005年7月~11月)	8

第2回国際ワークショップ「言語脳の探求」

さる7月2日(土)、3日(日)に本COEプロジェクト主催の国際ワークショップ「言語脳の探求」が行われました。今回のワークショップは、同時期に言語関係の学会・研究会がいくつか催されていたこともあって、参加者が少なくなるのではという危惧もありましたが、インターネットやポスター配布による地道な宣伝活動と、東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」が共催として協力してくださったこともあって、第1回国際ワークショップを上回る42件ものポスター発表、100名以上の参加者が集まりました。



準備を開始したのが4月、更に5名のオーガナイザーのうち2名は海外在住と、日数も会議の方法も非常に制限されていましたので、主に電子メールによって準備を進めていきました。時差を超えた熱いメールのやり取りは、チャット状態になることも数多ありました。3か月の準備期間で飛び交ったワークショップ関係のメールは、1000通を軽く超えています。

このワークショップは若手育成プログラムの一環として行われたこともあり、完全に「若手研究者による若手研究者のための企画」となりました。ドイツのマックスプランク研究所PDの廣谷氏、UCLA在学中の岡部氏、そして駒場にいる私の3名を中心にして、招待講演者の選定と手配、プログラムの編成、ワークショップの運営を行いました。また本COEのPD研究員、院生の方々がサポートしてくださいました。



今回のワークショップでは、言語の処理と獲得を巡って、心理実験的手法や脳機能測定を用いて検討を進めている、国内外の若手の気鋭の研究者10名による研究発表が行われました。本COEでも言語学と心理学・脳科学との融合研究は行われていますが、残念ながら日本に比べて欧米の方が研究が進んでいます。今回の研究発表者の人選にあたり、「若手で素晴らしい研究をしていること」、「話が上手であること」を重視しましたが、これは本当に正解でした。研究発表はどれも本当に素晴らしく、日本において心理言語学を研究する人達に大きなインパクトを与えたと思います。また個々の発表を巡って、スピーカー、ディスカッサント、聴衆による熱心なディスカッションが時間外にも多く行われ、「心理言語学の現在の状況」を肌身で感じる機会にもなりました。今回の編成で一番心残りであった

ことは、言語の「処理」と「獲得」の研究との間にある研究の方法論や理論的立場の溝をうまく埋めることが出来なかったことです。短い時間の中では、その溝を埋めるための十分な議論はできなかったかもしれません。しかしこの機会に、その溝を埋めるような研究が多く行われるようになったら幸いです。スピーカーの方々からも、普段はあまり触れることが出来ないさまざまなテーマの発表を聞くことができ勉強になった、参加して良かったという感想がありました。

また、ポスターセッションにおいては、トピック、手法ともに非常に多岐にわたる研究が発表されました。文処理、言語獲得、言語産出、プロソディ、感情、談話理解など、現在の言語学における主要なトピックが殆ど発表され、その研究手法も脳機能測定や心理実験が多かったことが特徴的でした。ポスターセッションの時間は2時間だけでしたが、それ以外の時間にもポスターを見学したり、ポスターの前で意見交換を行ったりしている参加者も多く見受けられました。今回口頭発表された方々は、言語学的理論を元の実証的研究を行っている「言語学者」ばかりでしたが、ポスターセッションにおいては、心理学的立場から言語処理や獲得を検討している研究も多く見受けられました。今後は、自分自身も心理学の立場から言語学に対してインパクトを与えるような研究をもっと行っていかなければと強く感じました。

最後になりましたが、このワークショップは、限られた時間の中で不慣れた若手中心で運営されたので、行き届かない点もたくさんあったと思います。ワークショップに関わってくださいましたCOE内外の多くの方々に深く御礼申し上げます。

(本COE特任研究員: 小林 由紀)



若手研究発表支援—国際学会発表

人間行動進化学会 (HBES2005) 報告

長谷川研究室 沖 真利子 (修士課程1年)

去る6月1日から5日まで、テキサス州オースティンで開かれた人間行動進化学会 (HBES2005) に参加した。その中で、私は学部時代の研究内容 (成人男性の唾液中テストステロン・コルチゾール濃度が、攻撃性・怒りっぽさといった心理特性に与える影響) についてのポスター発表を行った。私と同じくホルモンを研究している方々だけでなく、異なる分野の研究者からも有益なコメントをいただけたことは嬉しい限りである。発表やパンケットを通じて海外の心理学者との人的交流を深められたことは、今回の学会参加における何よりの収穫だと思う。会全体の感想としては、いかにも領域横断的な学問にふさわしい、多岐にわたる発表テーマに驚かされた。また、世界各国から集った若手研究者たちの、研究に対するエネルギーを身近で味わえたことは、自分が研究活動を続けていく上で大きな励みになると確信した。こうした貴重な経験を糧にして、来年も同じ学会で有意義な研究発表ができるよう、今後も真剣に課題に取り組んでいきたい。

International Meeting of Psychometric Society 2005 会議報告

繁樹研究室 岡田 謙介 (修士課程2年)

Psychometricsの分野で最も大きく権威ある学会である、Psychometric Societyの年次研究会 (IMPS2005) に参加した。学会はオランダのTilburgという郊外都市において、まるまる1週間をかけて行われた。

まず、良いと感じたのが学会前後のワークショップが充実していることである。1日はWinBUGSという、MCMC法を使って複雑な統計モデルにおける数値的な予測を行うための手法のワークショップに、もう1日は探索的項目反応理論のワークショップに参加した。1日で非常に高度な知識と技術が身についた。研究発表会の方は、日本の心理系学会では隅に追いやられがちな統計的話題が正面からとりあげられており、とても楽しいものであった。項目反応理論セッションが7つ、共分散構造分析 (SEM) のセッションが5つ、因子分析のセッションが2つあり、またほかにもコレスポネンス分析や因果モデルなど類似の多変量解析手法がそれぞれ別個のセッションとして扱われていた。こんなにも同じ関心を持っている人たちが世界にいるのだと感激した。また、論文で名前をいつも見ている著名な先生方の発表を聴くことができ、休憩時間にはコーヒーを飲みながら間近で話げできたことは有意義な経験であった。私自身はSEMの適合度指標に関する発表を行った。類似した内容の発表がほかにもいくつかあり、やはり注目されている分野なのだ、と焦りを覚えた反面、まだ世界レベルでもここまでしか研究は進んでいないことがわかり、自信をつけることもできた。実際に、早く英語で論文を書きあげなければいけないと痛感した。

来年はカナダで、そして再来年は東京大学に場を移して、IMPSが開催される。ぜひこれからも積極的に参加し、刺激を受けて自分の研究を磨いていきたいと思う。

韓国日語日文学会報告

生越研究室 李 光輝 (博士課程3年)

今回参加した韓国日語日文学会は、韓国を中心に日本語学や日本文学などの研究者が一同に会する学会であり、2005年度国際学術大会・夏季学術大会は、6月17～18日、韓国の全北大学校にて開催された。

国際学術大会の語学の分野では「韓国語対照研究の理論と方法」のテーマのもと、日韓の先生方による様々な議論が行われ、今後の日韓対照言語学における指針が示唆された。夏季学術大会における発表では、日韓対照のテーマがほとんどを占めていたが、私の発表は、「日本語と韓国語の文末表現の対照研究—「ってば」と「lanikka」について」というタイトルで、それらの相違を考察した。具体的には、「lanikka」は、「lako hanikka (しろと言うから)」の文法化した文末表現であることを、「lako hanikka」との入れ替えが不可能で、引用される命令文の主語は発話時の話者に制限され、上昇イントネーションをもつ点などから検証した。またこれと同様、疑問の強調の「nyanikka」、勧誘の強調の「canikka」、述べ立ての強調の「tanikka」なども文法化した文末表現であることを示した。これに比べ、日本語の「ってば」は「といへば」の文法化した文末表現であり、「ってば」の接続する文のムードにかかわらず、強調の機能をもち、このような「lanikka」と「ってば」の違いは、それらの文法化の過程に含まれるムード語形の違いによるものであることを指摘した。「nikka」は主に理由を、「ば」は仮定を表すものであるが、大きく条件というカテゴリーに属する接続詞であり、また両表現共に自分の発話を引用しそれを強調するという点で、両言語の発想における共通点が一つ確認できたといえよう。

両言語の文末表現の文法化については、様々な研究者よりコメント、今後の課題についての示唆を得ることができた。会議全体においては、日本語と韓国語における対照研究の必要性を再認識させられた。

新しい研究動向 — こんな研究をはじめました！

上野 有理（本COE・特任研究員）

ヒトも含め動物はみな、生きるために食べなくてはならない。その意味で食行動は、種を超えて普遍性をもつ基本的行動といえる。私たちヒトは、実にさまざまなものを食べる。利用する食物資源の種類は他に類をみないほど幅広く、その多様さは、他の動物とヒトを分かち特徴の1つだ。ではヒトは、どのようにして食物について学び、食習慣を身につけるのだろうか。その過程は他の霊長類と、どのように異なるのだろうか。

食物経験をつむ過程で、どのように他者と関わるのかという点に注目して、これまでチンパンジーをはじめとするヒト以外の霊長類で研究をおこなってきた。すると食行動という基本的な側面においても、チンパンジーとヒトでは相違のあることが示唆された。ヒトの子どもは、他者からさまざまな形で影響を受けながら、食物について学び、食習慣を身につける。とくに養育者は「これを食べなさい」「これは食べてはダメ」と子どもに教育をする。いっぽうチンパンジーの場合、母親が子どもに食物について積極的に教えることはない。母親の食べる幅広い食物を経験し学ぶためには、子どもから母親への働きかけが重要である。

こうしたチンパンジーとヒトの相違が何によるものなのかをより詳しく検討するために、チンパンジーにたいするのと同じ手法をもちいて、ヒトの母子を対象に観察をおこなっている(図)。食物をめぐる母子間交渉を縦断的に観察することで、その発達の推移を明らかにし、さらにチンパンジーにおけるデータと直接比較する。進化的にみて食事場面は、積極的な母子間交渉が強化されうる場面と考えられる。その食事場面に注目して母子間交渉の詳細を明らかにし、進化的・発達のみにて「いつ」、「どのような」非言語的コミュニケーションが可能なのかという観点から結果を捉えることで、言語によるコミュニケーションの背景となるものについても検討したい。

さらに、脳の進化と切り離してヒトの進化を考えることはできないとの視点から、個体間交渉の基盤となる社会的認知にかかわる脳活動についても、種間比較を予定している。現在、脳波計測を専門とする他の研究者と

共同で、覚醒チンパンジーの脳波計測をおこなう計画が進行中だ。近年、ヒトを対象とした脳波研究が進むなか、ヒトの比較対象として、チンパンジーにおけるデータの必要性はますます高まっている。しかし覚醒チンパンジーでの脳波計測は実施が難しく、これまで例がない(新生児を除く)。本計画では覚醒下のチンパンジーを対象に、1)脳波機能計測の方法論を確立し、2)社会的認知などの課題時の脳波計測をおこなう。最終的には、同じ手法をもちいて測定したヒトのデータと直接比較をおこない、進化的視点からの検討を目指す。

これら複数の視点や手法に基づいてヒトとチンパンジーを比較することで、ヒトの特徴を多角的に捉えることができるだろう。さらにそれらをもとに、言語の利用を可能にしたヒトの特徴とは何なのかを検討していきたい。

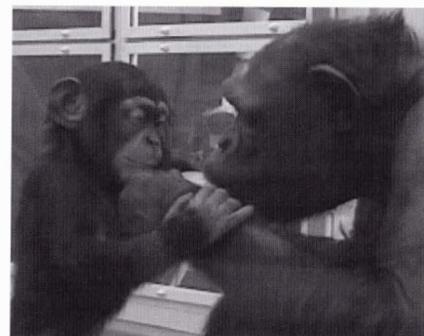
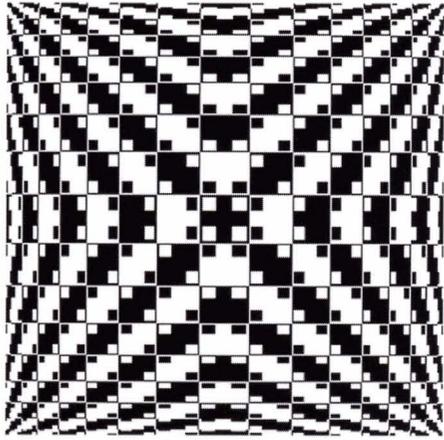


図 食物をめぐる母子間交渉の様子
上：ヒト、下：チンパンジー
(京都大学霊長類研究所提供)

錯覚展報告



北岡明佳「クッション」

『錯覚展-心の働きにせまる不思議な世界』というイベントを、7月16日(土)～9月18日(日)という約2ヶ月の会期で駒場博物館にて開催いたしました(好評につき、1日延長して19日まで開催)。火曜日を除く毎日10時～18時に開館し、入場無料でどなたでもお越しいただけるような錯覚の展覧会です。このイベントは、本COEと自然科学博物館との共催として行ったもので、日本基礎心理学会および株式会社ベネッセコーポレーションの協賛と、立命館大学文学部心理学科および東京大学教養学部社会連携委員会の協力を得て、大成功のうちに滞りなく会期を終えることができました。

夏休み中のイベントということもあり、この展覧会では中高校生を主な入場者と想定して企画しました。大学で行われている研究活動の一端を、この年齢層にわかりやすく、かつ正確に、さらに魅力的に、紹介していくことに注力しました。本COEから長谷川寿一リーダー・村上郁也・川島尊之が参画し、博物館スタッフ

と打ち合わせを重ねました。視覚の錯覚図形デザインの第一人者である立命館大学の北岡明佳先生に企画の最初の段階から関わっていただき、北岡先生オリジナルの錯覚図形作品を24点(カラー図版20点、白黒図版4点)出展することとしました。それに付随して、知覚心理学の分野で古くから扱われている錯覚図形を12点展示して、北岡作品との関係性を簡単に解説しました。

北岡作品を展覧会の中核に据えながら、静止図形や運動図形を観察したときに生じる視覚運動の錯覚をCRT画面に映して紹介するコーナーを4点設けました。また、聴覚の錯覚デモンストレーションを2点、画面とスピーカーとヘッドフォンを常置して行いました。いずれもコンピューターによるオンライン制御での展示です。会場の中ほどには20世紀の美術家マルセル・デュシャンによる錯覚美術作品「ロト・レリーフ」などを展示し、展覧会の懐の深さをアピールしました。さらに、空間を利用して29枚の説明パネルを設け、個々の錯覚現象のメカニズム、知覚心理学研究の重要性、進化・個体発達・環境適応の最適例としていかに錯覚研究が扱われているか、などを解説しました。

会期の直前(7月8日)には、社会連携委員会の主催で開講されている公開講座『高校生のための金曜特別講座-21世紀の知への誘い』の1コマを担当し、『錯覚(心の不思議):駒場自然科学博物館の展示を見ながら』と題して、本COEを初め本学の進化認知研究活動を俯瞰した後、博物館にて展示説明を行いました。また、会期中盤(8月6日)には、日本基礎心理学会と自然科学博物館の共催になる公開シンポジウム『イリュージョン-錯覚から知る心と脳の働き』に本COEとして協賛し、

約200名の参加者に対して、錯覚展に関連して研究紹介をしました。

ポスターおよびチラシを学内外に掲示・頒布した効果もあってか、連日非常に多くの来場者を得ました。1日平均190名、会期全体ののべ人数で11,025名の方にお越しいただけました。駒場博物館創設以来、最高の入館者数です。回収アンケート数(829枚)も過去最高でした。錯覚展のオールカラー・リーフレットは、会期終了後も駒場博物館にて常時無料配布しています。

(文責: 村上 郁也)



研究者紹介 (その6)

石田 貴文 (人間進化学部門)

研究内容を一言でまとめると?

人類の環境への適応、人類の多様性と小進化、民族と疾病、ヒトと他の霊長類・脊椎動物との種差等についてフィールドとラボをあわせた研究をおこなっています。そのため、小さい方では分子から、ウイルス、細胞、そして大きい方ではヒトやサル、ゾウの集団まで扱うことになります。材料集めにフィールドへ、そして実験室で解析をします。

COEでは主にどのような研究を行っていますか?

上に書きました3つのテーマの3番目の、「ヒトと他の霊長類・脊椎動物との種差等」に関連した、チンパンジーの情動関連遺伝子の解析と、社会的ストレスと免疫能について研究をおこなっています。ヒトらしさを分子から解き明かすことを最終目的とする大枠のなかで、統合失調症・新奇性探求・ADHDとの関連が示唆されているコレシトキニン受容体、ニューロペプチドY及びその受容体関連遺伝子の類人猿比較ゲノム解析をおこない、これら遺伝子が進化的に保守的であること、人で疾患と関連が疑われている対



立遺伝子の中には類人猿で普遍的に存在するものがあることが判明し、進化医学の観点からも興味深い結果が得られ始めました。一方の社会性ストレスと免疫ですが、特に「病は気から」という言い回しが昔から気になっていました。幸いにして、本COEに参加してチンパンジーの集団形成に立ち会う機会が与えられましたので、その間の行動観察データと免疫レベルについて関連性を調べることにしました。方法としては、体内に自然潜伏感染しているウイルス(免疫が低下すると活発になる)をウイルスDNAを指標に定量し、観察したエピソードや社会内の順位とどのように関連するかを調べ、行動観察と分子レベルとの統合を目指しています。

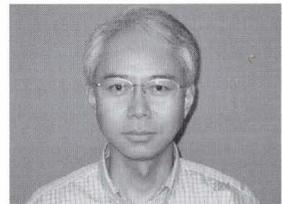
生越 直樹 (統合言語科学部門)

研究内容を一言でまとめると?

日本語と朝鮮語の対照研究、特に文法のテンス・アスペクト、ヴォイスに関する研究が主たるテーマです。構造が似ている両言語を比較対照することにより、その異同から両言語特有の特徴を明らかにしようとしています。さらに、そこから言語の普遍性と多様性についてもより詳細な検討ができるのではないかと考えています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか?

まず、日本語と朝鮮語の対照研究をより活発に行うために、年に数回「日韓対照研究会」という研究会を開催し、外部の講師による講演と東大の院生による研究発表を行っています。これまでに研究会を3回行うとともに、2004年3月には韓国の梨花女子大の研究チームと日韓対照研究と韓国語教育に関する国際シンポジウムを行いました。研究会活動と並行して、院生たちと日本語と朝鮮語のモダリティに関する対照研究を進めています。客観的な事柄を表す命題部分に対し、命題に対する話者の心的態度(質問、確認、依頼、命令など)を表すのがモダリティです。ことばの中でも「心」に近い部分だと考えられ、このCOEの研究では中心課題として取り組んでいきます。これまで日本語のモダリティに関する研究は多くなされていますが、日本語と朝鮮語の対照研究はほとんどなされていません。対照するときの枠組みの設定などが難しいことも、研究が少ない原因でしょう。しかし、両言語の特徴を考える上でモダリティは非常に重要な部分であり、研究の進展が望まれています。我々の取り組みは、まだ研究の初期段階ですが、現段階では様々な取り組みを積み重ねていくことが大切だと考えています。今年度中には、これまでの研究会の成果とモダリティ研究の成果をまとめて、報告書として刊行する予定です。



田中 久美子 (計算言語科学部門)

研究内容を一言でまとめると?

人間の記号処理を支援するソフトウェアの構築と、そのようなソフトウェアを作るための言語などコンテンツの数理モデルを構築する基礎研究を行っています(分野:言語処理、ユーザインターフェース、情報検索、計算記号学、情報記号論)。応用研究では、1. ユニバーサル技術としての予測入力システムの構築、2. 意味の観点からの画像などのコンテンツ処理、3. 語学学習支援ツールの構築、基礎研究では、4. エントロピーと意味の関係に関する基礎研究、5. Zipfの法則の解明とそれを表現する数理言語モデルの構築、6. 単語難易度の数理的モデルの構築などを行っています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか?

上の3と5に関して、「人が間違うのはどのようなところか」「難しい単語とはどういうことか」との二つの問題に挑戦しています。

◎既存の校正結果を利用した自動校正: MS-Wordなどの校正ツールを使ってみるとわかるように、現在の自動校正には限界があります。本研究では大量の校正結果から校正ルールを自動抽出し、それをもとにした自動校正の可能性を探っています。大量のデータから得た校正ルールを概観することで、

人間はどのようなところを間違うのかを解明し、それをもとにした自動ヒント機能の構築も考えています。

◎文書の難易度判定: 語学学習支援においてはユーザのレベルに応じた教材の提示が必要です。つまり、文書の難易度を判定をすることが一つの鍵になります。文書の難易度の自動判定は、現在は漢字の割合や長い単語の割合など、ヒューリスティクスによる方法しかありません。本研究では、ある単語が難しいとはいかなることかを統計的に記述し、それに基づいた言語汎用の難易度判定の方法を構築します。尚、語の難易度と単語の頻度は必ずしも相関しません。易しい単語でも頻度の低いものがあるし、難しい単語でも頻度の高いものがあります。それでは、単語の難易度を決める要因は何なのか、この点を解明しようとしています。



プログラムの近況

(2005年7月～10月)

採択から3年目、本プログラムに対する中間評価が行われ、その評価結果が10月11日に公表された(日本学術振興会のホームページでも公開されている)。その内容は、下に示す通りであるが、総括評価としては「一層の努力が必要(5段階評価の2番目)」とのことであった。ただし、具体的なコメントの中では、本COEの活動のうち若手研究員が活発な相互交流を通して力をつけつつあることが高い評価を受けた。若手の研究支援を重点項目におく本プログラムとしては嬉しい評価である。

中間評価は1月に提出した書面審査、5月のヒアリングを経て、本COEに対しては7月に半日がかりの現地調査も実施された。ヒアリング当日は、拠点形成の進展状況について、融合研究の具体的な成果が見えてこないという厳しいコメントが複数の評価委員から述べられた。それを受けた夏の現地調査では、ラボの現場で新しい融合研究が実際に進んでいる姿を見ていただけるよう若手研究員が中心となって準備した。4名の評価委員の方々に加えて、桐野東大副学長や木畑総合文化研究科長にも現地をじっくり視察していただけたのは、大変によい機会であったと思っている。中間評価の結果は、次年度以降の予算に反映され、一般社会からも注目されるということもあり、準備段階では胃の痛い日々が続いたが、今後は、いただいた助言を真摯に受け止め、プログラム後半の収穫期に向けて努力を続けていきたい。

(拠点リーダー：長谷川寿一)

● 本COEについての中間評価が公開されました ●

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

人材育成については、様々な研究歴や教育歴をもった若手研究者がCOE研究員として採用されており、各研究員の間には密な日常的交流が見受けられ、互いに新しい視点や方法論など多くの刺激を得ることによって、従来の研究関心が大きく展開した研究テーマの設定や絞り込みが行われている。また、恵まれた空間が確保されており、若手研究者の自律的な研究サイトの設定および実験実施を通じて研究者としての力をつけつつある点などは評価できる。研究活動については、本プログラムの目指す「心とことば」の複合的学際的研究の統合研究モデルが提示され、現在までに達成あるいは進行中の個別研究の位置づけと意義が説明されたことにより、本プログラムの進行状況を俯瞰的に理解し得た。中間段階として実現可能な範囲で研究は進行していると思われるが、今後、このモデルが若手・コア研究者間で実証研究の進展と同時並行して更に検討され精緻化されることが求められる。有機的連携については、異分野研究者の交流において、若手研究者および事業推進者の中核メンバー間の交流は活発である。また、これまで蓄積された研究の公開、講演会などの実績もベースに、進化認知科学研究センターや進化認知科学の専攻コースの設置が学内で構想準備されており、さらに進化認知科学国際学会の開催も決定しているなど、本プログラムの成果への期待は大きい。

活動報告

1 COE研究発表会(事業推進者等の研究発表・討論会)

第28回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005

日時: 2005年10月12日(水)
場所: 13号館1313教室
担当: 長谷川寿一
演者: 長谷川寿一
演題: 「イントロダクション: 進化認知科学の目指すもの」
要旨: 新しい世紀に入り、環境・エネルギー問題、人口問題、民族紛争を抱えた人類は存亡の曲がり角にさしかかったといっても過言でない。進化認知科学(あるいは進化心理学)は、生物としてのヒト、進化的存在としてのヒトという観点から、人間科学を再統合し、人間性がどこから生まれ、どこに向おうとしているかを考える新領域である。ここでは、人文社会科学と自然科学との融合やヒトと類人猿との比較研究がなぜ不可欠かを論じる。

第29回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005

日時: 2005年10月19日(水)
場所: 13号館1313教室
担当: 長谷川寿一
演者: 小林洋美(JST)、橋瀬和秀(九州大・人環)
演題: 「グルーミングする視線—コミュニケーション装置としての目の進化」

第30回 COE研究会 進化認知科学連続セミナー2005

日時: 2005年10月26日(水)
場所: 13号館1313教室
担当: 長谷川寿一
演者: 小林春美(東京電機大)
演題: 「ヒトはことばの意味をどう獲得するのか」

2 COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第26回: COE共催シンポジウム

「イリュージョン: 錯覚から知る心と脳の働き」
日時: 2005年8月6日(土) 午後1時~5時
会場: 教養学部学際交流ホール
担当・司会: 長谷川寿一
挨拶: 辻 敬一郎(日本基礎心理学会理事長・中京大学)
研究紹介: 「日本文学からわかる脳の仕組み」村上郁也(東京大学)、「周辺ドリフト錯視からわかること」北岡明佳(立命館大学)、「運動錯視について」野澤 晨(日本基礎心理学会)
心理学を学べる大学の紹介、ブース展示

第27回: COE共催シンポジウム

「日韓対照研究会」
日時: 2005年11月5日(土) 午後1時30分~5時
場所: 駒場キャンパス18号館4階会議室
担当: 生越直樹
招待講演: 堀江薫(東北大学)「日韓語の名詞と動詞の連続性: 文法カテゴリーのfluidityの観点から」

3 COE主催・共催研究会

第46回: COE共催研究会: 東京音韻論研究会

日時: 2005年6月19日(日) 午後1時~
会場: 駒場キャンパス10号館301会議室
担当: 田中伸一

発表者および発表題目: 小松雅彦(北海道医療大学)・青柳真紀子(獨協大学)「日本語自発音声における母音無声化とモーラリズム—OGLTSの音声ラベルの分析」、岡崎正男(茨城大学)「韻律的倒置再考: 生起条件の形式的特定と詩的效果」

第47回: COE共催研究会: 東京音韻論研究会

日時: 2005年7月3日(日) 午後1時~
会場: 駒場キャンパス10号館301会議室
担当: 田中伸一
発表者および発表題目: 新谷敬人(UMass大学院)「Lexical accent and the perception of intonational peaks in Japanese」、孫範基(東京大学大学院)「日本語における母音連続回避のためのわたり音挿入について」

第48回: COE共催研究会: 意味論研究会

日時: 2005年7月15日(金) 午後4:30~
場所: 駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム2
担当: Christopher TANCREDI
講演者: 田中拓郎(University of Connecticut)
タイトル: Japanese Nominative Morpheme as Negative Attitude Expression

第49回: COE共催研究会: 日本臨床社会心理学研究会(JACS)

日時: 2005年7月16日(土) 午後1:00~3:00
場所: 駒場キャンパス2号館308会議室
担当: 丹野義彦
発表者: 荒川裕美(東京大学大学院総合文化研究科)
題目: 青年期における妄想的観念の発生メカニズムに関する研究

第50回: COE共催研究会: 日本臨床社会心理学研究会(JACS)

日時: 2005年8月6日(土) 午後1:00~3:00
場所: 駒場キャンパス2号館 308会議室
担当: 丹野義彦
発表者: 山崎修道(東京大学大学院総合文化研究科)
題目: 統合失調症の妄想と健常者の妄想的観念

第51回: COE共催研究会: 東京音韻論研究会

日時: 2005年9月18日(日) 午後1時~
会場: 駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム4
担当: 田中伸一
発表者および発表題目: 樋口麻璃衣(獨協大学大学院)「Prosodic Influences on the Resolution of Japanese and English Ambiguities」、Shigeto Kawahara(University of Massachusetts, Amherst) and Kaori Akashi(University of Tokyo)「The Markedness Hierarchy of Geminates and Mimetic Gemination in Japanese」

第52回: COE共催研究会: 東京音韻論研究会

日時: 2005年10月16日(日) 午後1時~
会場: 駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム4
担当: 田中伸一
発表者および発表題目: 高野京子(東京大学大学院)「Consonant deletion in loanword adaptation」、白石英才(札幌学院大学)「Lenitionとしてのニヅフ語の子音交替: effort minimizationか、それともinformation lossか?」

東京大学 21世紀COE「心とことば—進化認知科学的展開」

〒153-8902 東京都目黒区駒場3丁目8番1号
東京大学駒場キャンパス17号館
TEL/FAX 03-5454-6709
ホームページ <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>
発行日 2005年11月25日